

酒田のばばちゃん

母親の実家は酒田で港を見下ろす日和山公園の近くでした。酒田には日本一の大地主と言われた本間家が残した遺産が沢山あります。「本間様には及びはせぬが、せめてなりたや殿様に」・・・と流行唄にもなったそうですが「損をして得をとれ」で多くの慈善事業や小作農の保護活動に力を注ぎ庄内藩と共に地域振興を図りながら財を成したそうです。

酒田市は最上川の河口で上流地域(米沢・山形・新庄など)から川船で米・紅花・絹織物などの特産物の集積地で北前舟の東北随一の寄港地で昔から商業で栄え北前交易の拠点として「西の堺、東の酒田」と云われるほど繁栄していたようです。

NHKのドラマ「おしん」が子守で奉公に上がったような商家が沢山あり、京都と同じ酒田舞妓さんが今でも往時の栄華を伝えております。

(地元の古老に聞くと「おしん」よりもっともっと苦勞をした奉公人が多くいたそうですが、テレビ放送があつてから25年経ちます。世界で最もヒットした日本のテレビドラマで世界63ヶ国で放映されどの国でも最高視聴率を記録して、イランでは90%を越えたとの事です。おしんの生き様が人として本当に大切なものを教えてくれました)

母方の祖母をばばちゃんと呼んでいました。ばばちゃんは若いときから青果商を営んでいた元気な明るい人でした。兄と私は小学校に入った頃から夏休みと冬休みの殆どを酒田のばばちゃん宅で(母の兄家族と未婚の叔父、叔母の8人家族)過ごしました。

母は毎回、大きな唐草模様風呂敷に着替えて干しうどん等のお土産、往復の自動車を持たせて送り出してくれました。家から鶴岡駅まで歩いて約40分、鈍行の汽車に乗って藤島～西袋～余目北余目～砂越～東酒田～小一時間で酒田駅です。また歩いて30分程でやっぱばばちゃんの家に着く。着くと、ばばちゃんと同年代の従弟(女2人、男1人)3人がイグキタイグキタ(良く来た)と言って夏だと冷たい水道で冷した西瓜を切って食べさせてくれました。

朝から晩まで外で真っ黒けに日焼して良く遊びました。

日和公園、酒田港、大浜海水浴場、海に突き出した灯台、近くの砂丘(小山)、国営の米穀倉庫など遊び場は事欠きませんでした。ばばちゃんが遊びに付き合ってくれた帰りはアイスクリームやカキ氷を食べさせてくれました。鼻から頭にツーンとくる痛冷たい感覚が今でも思い出されます。

母は9人兄弟の3番目で上に姉と兄、下に弟4人と妹2人が居ましたが、下の2人を除いて所帯持ちでした。夕方になると毎日のように誰かが顔を出して晩ご飯を一緒に食べてました。

10人以上の食卓は賑やかでした。印象的だったのは冷麦を大ざるに一杯茹で上げてコチの出汁をぶっ掛けて一気に音を立ててスリ飲込む食べ方は豪快そのものでした。鶴岡での生活には無い色々な事が珍しくて面白い体験です。鶴岡と酒田で違うのは言葉で港街だけに威勢の良い早口言葉で独特な節回しでした。普通に話していても喧嘩しているように聞こえたり、怒られている様な雰囲気になったものです。ばばちゃんの後(青果商)を継いだ伯母さんがトマト、桃、瓜、西瓜など補給してくれたので空腹感は殆ど無かったように思います。夕食後は孫がばばちゃんの周りに集まって話を聞いて寝るのですが時たま子供にはオッカナイ話(殺人事件とか)が出てきたり「嘘つきは盗人の始まり」とか実話をもとに真に迫った話になります。時にはブルブルとくるような話を聞いた夜は離れの便所に行くのが怖くて兄を誘って行った事が何度かありました。

母の兄弟は仲が良かった。おじさん4人が戦地で終戦を迎えたが幸運にも無事帰還でき、母以外は全員酒田で所帯を持ち結束が強かったように思います。戦前に樺太や北海道で仕事をしていた叔父が3人いて北海道の素晴らしさを熱く語ってくれたことが、私と北海道の最初の関わりでした。

伯父さん方もボートに乗せてくれたり、海水浴に連れて行ってくれたり楽しい思い出を一杯つくってくれました。かに汁が大好きだった、ばばちゃんも90歳近くまでの天寿をまっとうしました。

今は叔父さん1人と叔母さん2人が健在で帰省の折には出来るだけ会いに行つて昔話に花を咲かせております。